文学と挿絵

奥　西　洋　子

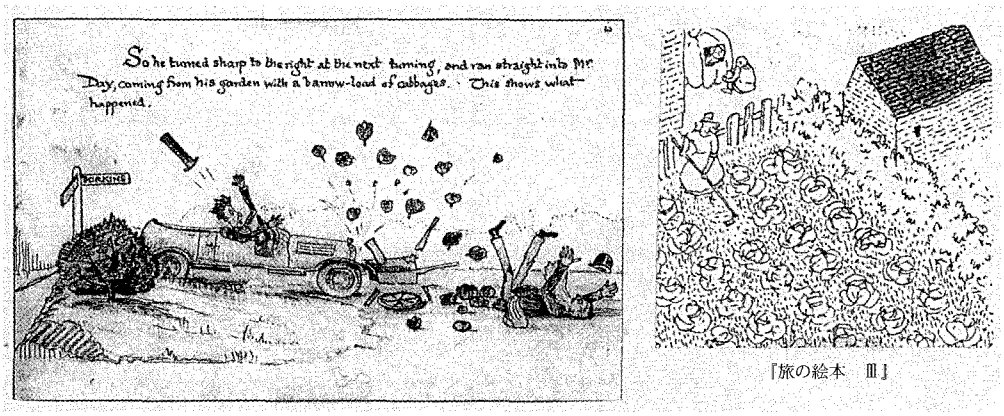
ルイス・キャロル（Lewis Carroll）が『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*）の挿絵をジョン・テニエル（John Tenniel）に頼んだ時、数学者としての業績があるとはいえ、無名の作家であるキャロルが、当代きってのイラストレーターに依頼したという感じであった。[1] キャロルは臆せず、細かく、うるさく注文をつけてテニエルを怒らせてしまったのは有名な話しである。細かいのも道理、キャロルはその前年に手書き原稿をアリスに贈り、挿絵も自分で入れていたのであった。挿絵は素人らしく、稚拙で線が弱弱しく、人物全体としてのバランスを欠くこともあるけれども、「ラファエル前派風の」[2] 娘らしい優しさが好ましい。キャロルはコミカルな絵が得意であるらしく、詩、「ウイリアムおとうさん」（'Father William'）の滑稽な挿絵が最高の出来栄えであると思う。

1　*Mr. Bliss*　— 絵本の試み

キャロルと同じくオックスフォード大学教授であったトールキン（J.R.R. Tolkien）は、もっと絵の才能に恵まれていたといえる。彼の初期の絵は *Mr. Bliss* に見られ、幼い自分の子供たちに読み聞かせたものであった。これはストーリーに挿絵を付けたというよりも、絵本の試みと呼んだ方がふさわしい。[3] 絵は、人物や動作は、どこまでもコミカルである。一方、穏やかな風景や庭の美しさ、端正に画かれた村の建物などは、いかにもイングランドの田園らしく、淡い柔らかな色調もあって、心休まる、いわゆる、最近流行の癒し系の絵となっている。

全体として、*Mr. Bliss* はノンセンス絵本である。臆病な伊達男（ピエロのように派手ないでたちである）の Mr. Bliss は、ひそかにジラビット（Girabbit = giraffe + rabbit）を飼っている。ある朝、彼は突然ひらめいて車を買い、たちまち Day 氏と Knight 夫人に衝突する。二人を乗せて走るうち、三匹のクマに car-jack され、やむなくクマも乗せて知人の Dorkins 一家を訪ねる。クマが菜園の野菜を食べ尽くしたために口論となり、クマは逃げ出して行く。皆は嫌がる B 氏をせき立ててクマを捕獲しに出かける。途中、午後のお茶をゆっくりと楽しんだために、クマの森に着いた時には、もう夜になっていた。ヒカリゴケをまとっ

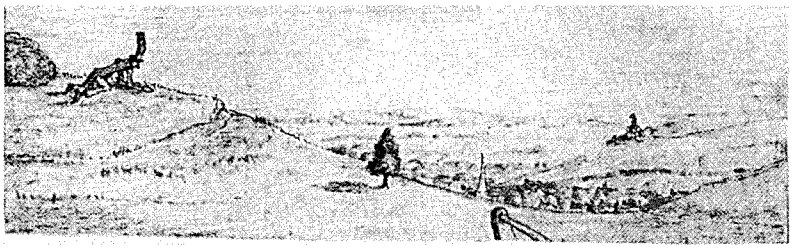
たクマに脅かされた B 氏は、一人逃げて一晩中走り続けた。ところが、意外にもクマは人々を夕食に招待し、大宴会の末、皆に快適な宿を与えた。一方、B 氏は夜明けと共に、たまたま自宅に辿り着いたが、家にはジラビットが入り込んで穴をあけていた。更に、自動車ディーラーから代金未払いで訴えられ、D 氏、K 夫人、Dorkins 一家、宿屋の主、クマたちから莫大な請求書を突きつけられ、支払ってみると、無一文になっていた。とはいえ、ジラビットが村の人気者となった今、村人たちと仲良く暮らして B 氏は幸福であった。



『旅の絵本　Ⅲ』

人物とその動きはコミカルで誇張されたものである。その代表的な例が p.10 の車と手押し車の衝突の場面であろう。B 氏、D 氏の表情、動作、飛び散るキャベツが衝撃を表しているが、むしろ、キャベツが雄弁である。トールキンはキャベツを画くのがうまく、p.21 にも、わざわざ美味しそうな紫キャベツを画き加えている。英国のキャベツは日本のそれより巻きが緩やかで横長であり、安野光雅氏が『旅の絵本　Ⅲ』に画いたキャベツと比較してみると面白い。国際アンデルセン賞の絵本賞受賞者である安野氏と比べるのは気の毒ではあるが、トールキンのキャベツも、かなりのものである。[4] ついでに、ベアトリクス・ポターの若いキャベツの写生もある。

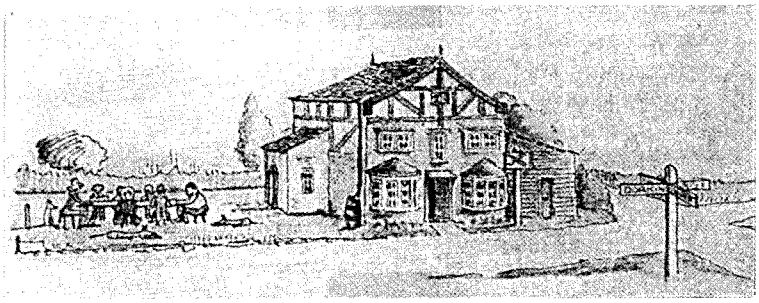
では、トールキンには人物は画けないかといえば、そうではない。P.35 のボフィン巡査部長の顔を見ると、その人柄、職業、人生などが滲み出た魅力ある顔である。人物画をよくする可能性もあると思う。ここでカリカチュアに終始したのは、この作品の性格から出たことで


P.33

あろう。

風景、花、木、庭、森などは、トールキンの得意分野である。特に p.33 の丘から見下ろした村の風景は、近景のなだらかな起伏、中景の家並みと教会の尖塔、夕日に染まる野原の間にかすかに見える旗（実はジラビットの頭）を遠景とする、典型的な風景画の手法に従い、[5] ソフトな色調を使ってイングランドの田園風景——彼が生涯、理想の土地として愛したイングランドの田園風景を描き出した好ましい絵である。

トールキンはまた、木を殊のほか愛し、後に樹人という生き物を創り出したほどである。だけあって、木の絵も特別の愛情を込めて画かれていて興味深い。P.13 の木肌、p.20 のリンゴの木、p.22 のコニファーなど。特にコニファーの生き生きした力強さが良い。園芸はイギリス人の最大の趣味であるといわれ、トールキンも後の作品の中で庭への称賛を口にするのであるが、p.20 、p.22 の庭を見ると、中心は木である。園芸の流行は花に移っている時代であったが、彼はあまりにも木が好きだったのだろう。

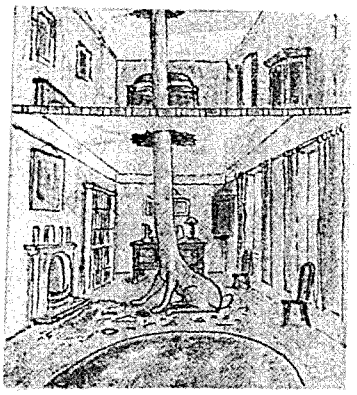


inn
(P.26)

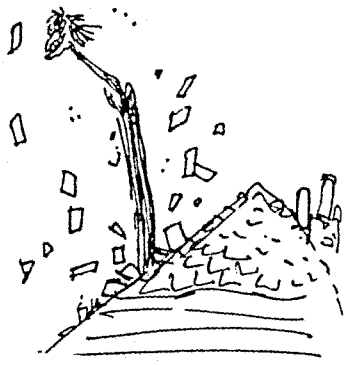
Mr. Bliss の中で、私が最も惹かれるのは建物の絵、特に十字路に建つ inn である。P.26 のチューダー風の black and white timber の古風な建物の前面が、二つの大きなボウ・ウインドウで飾られて、華やかさを添えられている。建物の片側はポーチのような部分が付け加わり、庭への出入り口となる。反対側にも付属部分があって、倉庫（buttery ?）か何かになっている。両脇をはさまれると中心部が暗いのではないかと思うが、その分、多数の窓が正面にしつらえてある。こういう建物の建て方は教会の形式を連想させ、落ち着いた雰囲気を与える。トールキンは几帳面な性格で、端正なものを好んだと思われる。この inn のように、きちんとした構図が得意である。後に、*The Hobbit* で、ベオルン（Beorn）の家を画いて、初期中世ホールの素朴な美しさを見事に表すのであるが、建築への好みは早くからあったと思われる。P.45 の、ちょっと洒落た青物屋、'Day & Knight' も捨てがたい魅力がある。あるいは、p.34 の自動車屋は、p.8 の同じ店とは信じられないほどに明るく、そして細密に画かれる。木戸の向こうの裏庭と、その奥にある物置小屋に至るまで見えている。二階の窓から眺めているビンクス氏の顔までも。

では、建物の内部はどうだろう。まずはクマの家のホール（台所？）が p.31 にある。簡素な造りである。天井を支えている木組みは古風なクイーン・ポスト形式で、質素なホールにふさわしい。愉快な宴会の場面である。クマ達は、それなりに生活を楽しんでいる様子で、お皿を並べて飾り、シェイクスピアの生家のようなチューダー朝の台所を想いだす。天井から下がるランプが、はるか上まで明るく照らし、椅子の背もたれには、それぞれ違った装飾が彫刻されている。絵まで飾ってあり、なかなか文化的生活であるらしい。部屋の隅でビール樽が軽くなって、倒れそうに見えるのがおかしい。

次もまた、宴会で、D 氏と K 夫人の結婚祝の席である。ここは B 氏の客間なので当然、クマの家より洗練されているが、関心は食べるもの、飲み物にあるらしく、部屋の中はあまり詳しく画かれていない。



食堂



ブレイク

もっと面白いのは、ジラビットが入り込んだ B 氏の食堂（p.39）であろう。ジラビットは天井を食べて上の寝室に達し、屋根裏部屋から屋根の上まで顔を出しているが、地階にある食堂の居心地の良い、暖かい雰囲気が良く表れている。ここでは居心地の良さに心惹かれるのだが、天井を次々と破って屋根から顔を出す可笑しさという点で、想いだす挿絵が Roald Dahl の *George's Marvellous Medicine* にある。これは、ジョージのお祖母さんが、ジョージの作った薬の作用で急に背が伸びて屋根を突き破って頭が飛び出す挿絵で、クエンティン・ブレイクの挿絵である。[6] クエンティン・ブレイクは素晴らしい挿絵画家で、画家ではないトールキンと比べるのはフェアでないが、素早い動き、驚くお祖母さんの滑稽な表情など、目を見張るほどの出来栄えである。挿絵は文学を助けるものだと言われるけれども、この作品に限って言えば、クエンティン・ブレイクがロアルド・ダールを助けているように思われてならない。

さて、最後に、この本の、もうひとつの魅力を強調したい。文章はすべて、トールキンの美しい筆記体で書かれている。幼い子供が苦労なく読めるように書かれたキャロルの筆跡と違って、自分が読んで聞かせるトールキンは、流れるような字体で、恐らくかなりのスピ

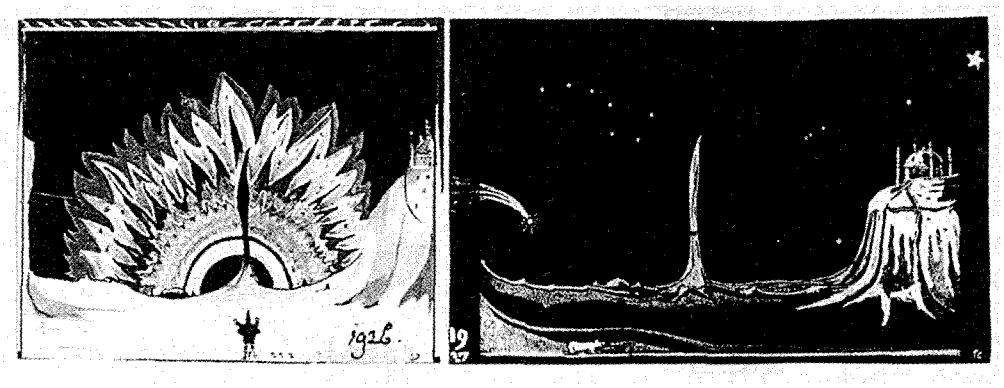
ードで、でも決して崩れない字体で書き続けている。幼い頃からカリグラフィーを習ったトールキンの字体は、柔らかく、温かく、絵と調和して美しさを増している。絵本は活字を使わないほうが良いのではないかと思うほどである。

Mr. Bliss は出版を意識して書かれたものではない。純粋に我が子のために作られた本である。それだけに、作家が伸び伸びと楽しんで作っている。そして、そのため、幼い時から学んだ絵の才能が開花し、すでに現れ始めていたユーモアを、更に発展させることになったのであろう。*Mr. Bliss* は、英国絵本史の中で十分に注目される一冊であると私は思う。

ストーリーの構成は典型的な冒険物語で、主人公が冒険に出かけ、無事に帰還する。途中でクマに襲われ、アワヤと思えば、意外にもクマとの宴会へと進み、迷子になった B 氏も、莫大な賠償金を払ったために、夏の旅行には行かれなかったものの、村人たちと仲良くなって、「その後、いつまでも幸せに暮らしました。」という定め通りの結末となる。

2 *The Father Christmas Letters* —— 結果としての絵本

The Father Christmas Letters [7] はトールキンが1920年から20年以上にわたって四人の子供たちに当てて送った手製のクリスマス・カードを、彼の死後、出版したものである。トールキンは Father Christmas（サンタ・クロース）を気取って北極から手紙を出した（ことにした）。（ちなみに、北極 — North Pole は、クマのプーさんと同じく、棒 — pole が立っている。）ここに集められた絵は、鮮やかな色使いが特徴で、1926年の絵がその代表であろう。これは、北極グマが誤ってオーロラを爆発させた、その光が中心にあり、真中に、North Pole が、無残にも黒焦げの状態で立っている。右手上方にある、モスクのような建物が Father Christmas の家である。空が異様に暗いのは、衝撃で星が落ち、月も割れて落ちたから、ということだ。



更に、もうひとつ、1927年の絵を見ると、これは、真っ暗な北極風景である。この二つの絵で分かるように、*Mr. Bliss* における写実的な絵と対照的に、*The Father Christmas Letters*

は、デザイン性の強いものが多い。(個々のクリスマス・カードとして注目を得ることが大切であったためだろうか。しかし、ストーリーを意識するようになった後も画風は変わらない。) 凝り性のトールキンは切手まで画いている。この切手が、いずれも北極らしい良いデザインぞろいである。

色使いもまた、*Mr. Bliss* とは、ずい分、違う。明るい、鮮やかな色が好まれ、特に華やかな二、三の絵は、絵本作家のブライアン・ワイルドスミスの色に近いものもある。この鮮やかな色は、その後、ホビット (hobbit) の好みの色として受け継がれていく。

Father Christmas が住んでいる北極の寒さを表わすために、トールキンは、その美しい文字を全て震え文字にしてしまった。たとえば、1933年の手紙は赤い震え文字で書かれ、大文字は黒で飾られている。800年ころに成立した福音書であるアイルランドの『ケルズの書』(*The Book of Kells*), あるいは、ずっと新しくなって中世文学、チョーサー (Geoffrey Chaucer) の写本などが意識されているのだろうか、ひとを惹きつける美しい書体である。[8] 震え文字が読み難いためか、出版された本の文章は大部分、活字に直されてしまった。残念である。*Mr. Bliss* と同じように、筆記体と活字と共に印刷して欲しかった。

1932年の手紙には地下の洞窟が画かれ、ゴブリン (goblin) との争いが始まる。そして、この洞窟が、*The Hobbit* の竜、スマウグ (Smaug) の臥所と似ているのである。[9] 内容から言っても、この頃から *The Hobbit* の構想が意識されて来たものと思われる。

3 *The Hobbit* —— 挿絵の完成

The Hobbit は、トールキンの挿絵が頂点に達した時だと思うが、ここには *The Father Christmas Letters* の技法を受け継いだものがいくつかある。その一つが洞窟である。これも、素朴ながら中世のホールを想わせるものだったが、スマウグの臥所になると、整然とした、立派な中世ホールとなった。いま一つ、稲妻光る恐ろしい 'The Mountain-path' は、全て等高線のような線で画かれている。これは、1931年の手紙の絵の手法を発展させたものである。手紙の挿絵が平板であるのと比べて、'The Mountain-path' は複雑な起伏が表現され、線の太さ、強弱によって遠近も画くことができた。'The Front Gate' の山

並みも同じ手法である。

かつての北極の山々は、更に厳しい氷の山となって、ワシに助けられたビルボウがワシの岩棚に心細げに寝ている場面の遠景に生かされている。ビルボウがいる岩棚も、ヒビだらけで不安げである。はるか下方に、頼もしい針葉樹林が見えるが、雲の中に霞んで、岩棚の高さが推測できる仕組みになっている。雲の画き方——横にまっすぐ線が伸びて、端がピッと上がる——は、基本的に同じ。強靭な嘴、哀愁を帯びた目の表情、逞しい足爪など、絵の中心になったワシの力強さが強烈に画かれ、氷の山々はワシの精神的な厳しさも表しているのであろう。ビルボウが小さく、岩陰に横たわっているので、ビルボウの無力感が読者の目に見える。

The Hobbit の創作年代は、*Mr. Bliss* よりやや後で、*The Father Christmas Letters* とは部分的に重なっている。が、*The Hobbit* の挿絵は、目を見張るほど円熟している。勿論、画家ではないので、いくつかの駄作もある。'The Trolls' や、'The Front Gate' は駄作であろう。しかし、その他はそれぞれに雄弁な絵である。特に面白いのは、炉を切って越し屋根をしつらえた、ごく素朴な木造りの部屋 —— 'Beorn's hall' 、典型的なイングランドの田園風景を表したホビット国の 'The hill'、不自然に整然と左右対称に植えられた木々によって、森のエルフの悪意を示したと思われる 'The Elvenking's Gate'、中世ホールを想わせる大空間にとぐろを巻いて貪欲に宝を守る竜の棲家 'Conversation with Smaug' であるが、この四枚の絵については触れたことがあるので、ここでは省略したい。[10)]

その他に良い絵は、エルフの国、'Rivendell' であろう。白い切り立った崖の裂け目に急流が流れ、エルフの館がポツンと建っている。白い崖はドーヴァー海峡から見た白亜質のイングランドの崖であろう。その峻厳さが、悪の侵入を拒むエルフの国に相応しい。川は英国のそれではない。トールキンが登山旅行で見た、雪解け水が迸るスイスの川である。奔流なればこそ、邪悪な者を溺れさせてエルフの国を守ることができる。この厳しい自然に守られて、エルフの国の平和が、崖の上に広がる森や、崖の下方に広々と続く木々の帯、川沿いの木々や草原、手前の草花などによって示されている。手前の隅にトールキンが愛した白樺が優美な姿を見せている。イングランドで最も美しいと言われる湖水地方の写真に、しばしば白樺越しに望む湖があり、優しい白樺があるために湖に変化が加わり、より美しい風景となるのを見るが、この絵も、白樺が歩哨のように立っているのが印象的である。白樺の黄葉によって秋の気配も察せられる。

あと一枚、興味深い絵がある。この絵が最も好きだという人も多いらしい。ビルボウと、その一行が、森のエルフの城から樽に乗って脱出する場面である。トールキンにしては珍しい、ハスのような丸い葉を持つ木々の間を川が流れ、遠景は朝日が明るく照らしている。丸い葉はどことなく愛嬌があり、決死の脱出行であるにもかかわらず、のんびりした川下りという感じになった。あまり細かく画き込まず、ゆとりを感じさせたのも、良かったかもしれ

ない。何よりも、前途に希望があるように日の光がさしている所が好ましい。

トールキンの次の超大作、『指輪物語』(*The Lord of the Rings*)[11] には、通常、彼の挿絵は印刷されていない。二、三の挿絵の他は、あまり出来が良くないからであろう。その後、プロの画家が様々に画いているが、なかなか、これといった作がない。

トールキンには未完の創作神話、*The Silmarillion* [12] がある。これに加えた挿絵が残っているが、神話の世界の表現は難しく、むしろ紋章などのデザインが優れている。

1998年にトールキンの初期のファンタジー、*Roverandom* [13] が、出版された。恐らく1926年に書かれたであろうと言われる。これに五枚の挿絵が付けられている。その一枚、1927年の署名が入った「人魚王宮の庭園」が、素晴らしい水彩画である。水中が、まだ未知の世界であった頃、よくこれほど画けたと思う。海ヘビの泳ぎ、海藻類の緩やかな動きも魅力的である。そして、何よりも近景の、目が覚めるような鮮やかな色合いと、遠景の暗い水底の対比が見事である。トールキンは、コミカルな絵、風景画や建築など静的なものは巧に画いた。反面、激しい動きのあるものは苦手だったと思う。

4　ベアトリクス・ポターの場合

二十世紀の絵本の元祖と言われるベアトリクス・ポターのピーター・ラビット・シリーズが出版されたのは、1902年から1913年であった。1971年には日本語訳も出ていたが、爆発的に人気が出たのは70年代の後半であったろうか。1974年に留学した時、私はまだ「ピーター・ラビット」を知らなかった。親切な隣人から、「英国の子供たちが必ず読んで育つ本」として紹介されたのが「ピーター・ラビット」だった。

「ピーター・ラビット・シリーズ」は、不思議な絵本である。擬人化された動物であるかと思えば、自然の動物そのものであったりする。たとえばウサギも、精密写生を得意としたポター（キノコの精密写生は貴重な博物学の資料として保存されている）にふさわしく、念入りな観察に基づいた自然の動物でもある。[14] その二つが共存して不自然でないのがポターの特徴であろうか。リス、ネズミ、イヌ、ネコなども同じである。

ポターの魅力は、まずは絵である。得意な動物は、やはりウサギであるが、私が最も惹かれる動物はリスである。シッポを立てて木の実を齧る動作（p.6）、イカダを組んで湖を渡るリスの群れ。

Each squirrel had a little sack and a large oar, and spread out his tail for a sail.（p.9）

C.S. ルイス（C.S. Lewis）は自伝の中で、*The Tale of Squirrel Nutkin* の絵をはじめて見た時の激しい歓びを述べているが、よく理解できる。リスのみならず、薄紫に輝く湖面や、遠方の山々など湖水地方の美しい景色もあって、ルイスの感受性に強烈に訴えたのであろう。[15] そして、ビー玉をしたり、バラの虫こぶを摘んだり、ついには踊り狂うリス。その重量感のあ

る柔らかいシッポの毛先が何よりも美しく、レイモンド・ブリッグズ（Raymond Briggs）の *The Bear* や、マーヴィン・ピーク（Mervyn Peake）の、笑い転げる白クマの毛並みとならんで動物の毛の波打つ微妙な輝きを見事に画ききっていると言える。

動物のほかには、風景の美しさがある。特に、*The Tale of Jemima Puddle-Duck* に集中的に表わされた森や丘、花などの優しい美しさ。庭や菜園、池などが、ある時は生活に密着して、また、ある時は風景画のように、柔らかい色彩で画かれている。絵を見るだけで心鎮まる効果がある。

とはいえ、「英国の子供が必ず読んで育つ本」となる理由はなんだろうか。私には、なかなか理解できなかった。淡い色の水彩画。庭が好きで、風景画を好む英国人の気質に合うことは、大きな理由となろう。動物愛護の進んだ国ということもあるだろう。けれども、ストーリーについて言えば、さほど面白くないものも結構ある。たとえば、*The Tale of Pigling Bland* のように。

そう思いながら読み返すうち、ポターの作品は非常に英国らしい、英国文化をよく表していることに気付いた。これが必読の書となる理由ではないか。英国らしさ、文化、日常性に着目して第一巻の *The Tale of Peter Rabbit* を見てみよう。

驚いたことに、各頁すべてに英国らしさを見て取ることが出来る。

まず、英国で特に愛されている動物たちがいる。主人公になったウサギは、ポターもペットとして飼った経験があったが、野生のウサギも汽車の窓からも見られるほど多くいて、ウサギ物語にもなっている。[16] また、その綺麗な鳴声のため愛されているブラック・バード（black bird）がいる。更に、多くの英国人が最も愛する小鳥はロビン（robin-the-redbreast）であり、ロビンは、ここでは、ただ、ピーターを見守っているだけの脇役ながら、5回も登場して来る。「あ、ロビン！」と喜ぶ子供たちがいるのだろう。ロビンは色鮮やかな姿、澄んだ愛らしい鳴声、町中であっても、いくらか樹があれば住みついて、人なつっこく近寄ってくるため、人気第一番の小鳥である。ロビンは、この9年後に、少女メアリーを秘密の花園へ導いて、ますます人気高騰となった。そして、1950年に、C.S.ルイスは、子供たちが「善良な鳥」として全幅の信頼を置く、真っ赤な胸と輝く目を持つロビンを『ナルニア物語』に登場させるに至る。[17]

意外なのはスズメで、ピーターが逃げられないと諦めて泣き始めた時、励ましに飛んで来る「優しい鳥」として選ばれ、最後にピーターが庭から脱出する様子を熱心に見詰めている。地味な鳥であるが、くっきりと画かれ、強い印象を与えている。

次に文化の重要な分野として、食物を考えてみよう。

最初にハッとするのは、母ウサギが、「お父さんは事故に遭ってパイにされた」と述べた時である。母ウサギは悲しげではなく、淡々と子供たちに警告している。のちに、ピーターが、必死で逃げ廻る時、ラビット・パイの影がちらついているわけで、ぜひ、必要な導入部である。

ラビット・パイやラビット・シチューは好まれる食物であるらしく、だからトールキンも『指輪物語』の第4巻で、衰弱したフロドウにウサギのシチューを食べさせたのだろう。

欧米すべてそうかも知れないが、野生の果物を摘んでジュースやジャムを作るのも、短い夏の愉しみごとである。ここでは、良い子のウサギたちが黒イチゴ（blackberry）を摘みに行く。もっと貴重品であるマルスグリ（gooseberry）は、大切に栽培されていて、鳥に取られないようネットを張って守っている。これにピーターが、絡まるのである。ピーターが脱出する道のわきには、クロフサスグリ（blackcurrant）の茂みがある。クロフサスグリが市場に出るのは、一年間に僅か一週間に過ぎないが、煮れば、家中が噎せ返るような強烈な香りがあって、その香りが喜ばれて人々が待ち兼ねている果物である。あと一つ、果物か野菜か分からないが（英国人の意識では果物であるらしい）、帰宅したピーターが倒れている床の上に置かれた薄赤い植物がルバーブ（rhubarb）である。（*The Tale of Jemima Puddle-Duck* の12頁に、よりはっきり画かれたルバーブが見える。）ルバーブは煮ると、鮮やかな紅色に変わる。このルバーブのパイが英国の子供たちに大変好まれるデザート（sweets）である。母ウサギは今からルバーブを煮るつもりであったろう。

ウサギ一家はハーブを商っている。そこで、恐怖と疲労で倒れたピーターは、早速、カモミール・ティを鎮静剤として飲まされる。これも、よくあることなのであろう。

"One table-spoonful to be taken at bed-time."（p.28）

は、伝統的な家庭薬の処方箋であろうか。

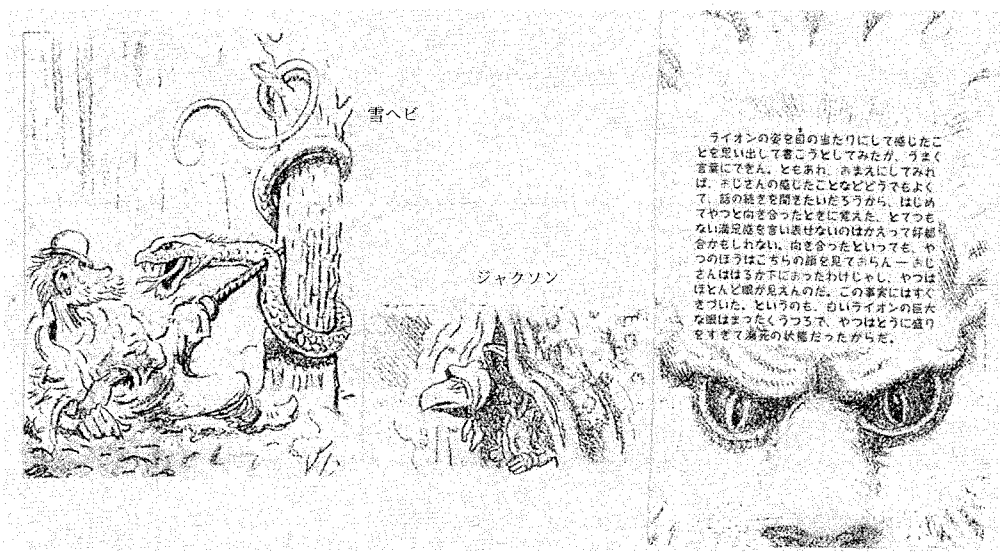
その他の植物は、ごくありふれた野菜で、レタス、インゲン豆、ラディッシュ、キャベツ、玉ねぎなど。最も大切に促成用フレーム（cucumber frame）の中で育てられているのがキューリである。キューリはこうして暖かい場所でないと育たないため、高価であった。最近は物流が変わったので事情が違うかもしれないが、70年代では1本のキューリをいくつかに切り分けて売り、それでも野菜としては高いほうだった。キューリのサンドウイッチが貴重で、貴族の夫人が楽しみにして食べに来るというオスカー・ワイルド（Oscar Wilde）の『真面目が肝心』（*The Importance of Being Earnest*, 1895年）が、やっと実感できた思いであった。

人々の生活習慣も、いくらか伺うことが出来る。晴れた日に雨傘を持ってパン屋へ出かける母ウサギ。人々のガーデニング好き、特にここでは19世紀から流行したキッチン・ガーデンの道具と栽培方法。暖炉でお湯を沸かす暮らし振り。そしてハーブの処方箋。

このように英国人の日常の生活文化を詳細に画いた絵本は、珍しいのではないか。文学として、絵としてだけでなく、文化史の資料としても重要なのではないか。だから必読の書となったのではないか。文化という立場をもっと強調して見て行くことが大切だと思う。

5　マーヴィン・ピークの場合

今年（2000年）１月に風変わりな翻訳書が出版された。『行方不明のヘンテコなおじさんからボクがもらった手紙』（*Letters from a Lost Uncle*）である。[18] 作者のマーヴィン・ピーク（Mervyn Peake）は、詩人、小説家であると同時に画家でもあり、『不思議の国のアリス』の挿絵も入れているとのことである。『行方不明のヘンテコなおじさんからボクがもらった手紙』は、どちらかといえば文より絵に重点がおかれて、この不思議な想像の世界が、まさに「目に見え」て表現された。



「ボク」のおじさんは、突然、冒険家となって、北極に白いライオンを追い求め、遂にライオンの死に立会い、そして、また、行く先分からぬ旅に出るという話しである。さすが画家だけあって挿絵が素敵に雄弁である。なかでも、やはり、主人公の「おじさん」と、サンチョ・パンザ役の亀犬、ジャクソンが最も面白い。「おじさん」は喜怒哀楽を表さず、殆ど無表情であるが、それでいて、それぞれの場面にピタリとはまっていて、読者に強く訴えかける。反対にジャクソンは常に感情を露骨に表す。危険な冒険の旅にあっては、嬉しいことなどあるわけもなく、いつも情けない、気の滅入る表情である。「おじさん」は、冒険家の弧高の魂を反映してか、常に空に鼻を向け、ジャクソンは、しょんぼりとうつ向いている。

マーヴィン・ピークは、ジョン・テニエルに劣らず動物を画くのが巧みである。とりわけ、優しそうなワニ（p.52）、カバの母子（p.53）、ワニの赤ちゃん（p.55）、雪ヘビ（p.57）、ペンギン（p. 69）、獰猛なハゲタカ（p. 79）などが優れていると思う。画家が最も力を注いだのは、恐らく白いライオンであろう。瀕死であっても力強く威厳のある目、頼もしい鼻（p. 118）、生き物のように波打つたてがみ（p. 128）。C.S.ルイスのライオン、ア

スランも、このような姿であろう。一方、ひどく可愛いのが北極クマで、柔らかそうな毛並みが美しい。

そして、面白いのは北極の太陽（p.8）で、これがトールキンのオーロラとよく似ている。ピークは、北極の太陽が「百本のどれもことなった色のたいまつのように輝き」（p.44）と述べている。（ピークは全て黒のデッサンである。）トールキンのオーロラは、百色には至らないが二人のイメージは同じようなものであろう。北極の風景もかなり共通点を持つ。出版は遅いが、画いたのはトールキンが先である。プロの画家と同じイメージをトールキンが抱いたのは、その想像力が優れていたからであろう。

豊かな想像力を表現する画才に、ある程度めぐまれたトールキンは幸運であった。願わくば、彼が愛したノンセンス絵本を、あと２、３冊、残して欲しかったと思う。*Roverandom* が1998年に発見されたことを考えると、思いがけないプレゼントを Father Christmas が届けてくれる可能性もゼロではないと思うのだが。

注）

1）「児童文学世界」No.1（中教出版、昭和53年）参照

2）*Alice's Adventures Under Ground* は1864年、アリスに贈られた。1886年、ファクシミリ版に。1985年、百年ぶりにファクシミリ版が Pavillion Books Limited より再販された。原本は今、British Library 所蔵。Cf. p.19

3）J.R.R. Tolkien, *Mr. Bliss* ,（George Allen & Unwin, 1982）書かれたのは1932年であろうと考えられている。

絵本とは、絵が主体となって語るものであり、ストーリーが中心で、それを助ける役割として絵が入る場合が挿絵である、と考えられている。

松居　直　『絵本とは何か』（日本エディタースクール出版部、1994）参照

4）安野　光雅　『旅の絵本　Ⅲ』（福音館書店、1981）

5）高橋　裕子　『イギリス美術』（岩波新書、1998）参照

6）Roald Dahl, *George's Marvellous Medicine*（Puffin Books, 1981）（Illustrations by Quentin Blake）

7）J.R.R. Tolkien, *The Father Christmas Letters*（George Allen & Unwin, 1976）

8）*The Book of Kells* は、アイルランドの至宝として、現在、ダブリン大学トリニティ・コレッジのオールド・ライブラリーが所蔵している。私が持っているものは、その一部を復刻したもの。

The Book of Kells（Thames and Hudson Ltd., 1980）

9）J.R.R. Tolkien, *The Hobbit*（George Allen & Unwin, 1937 初版）

カラー挿絵13枚を入れているのは、1976年の　De Luxe 版である。

10）相愛短期大学「研究論集」第46巻、1999年、「トールキンの *The Hobbit* とその背景」　pp. 75-86

11) J.R.R. Tolkien, *The Lord of the Rings* (Geroge Allen & Unwin)

第一部は1954年、初版。第二部は1954年、初版。第三部は1955年、初版。一冊にまとまった India paper edition は、1969年に初版が出た。

Wayne G. Hammond and Christina Scull, *J.R.R. Tolkien, Artist & Illustrator*, (Harper Collins Publishers, 1998) によってトールキンの挿絵とデザインを見ることが出来る。

12) J.R.R. Tolkien, *The Silmarillion* (George Allen & Unwin, 1977 初版)

13) J.R.R. Tolkien, *Roverandom* (Harper Collins, 1998 初版)

14) Beatrix Potter, *The Tale of Peter Rabbit* (Frederick Warne & Co., 1902 初版)

1998年以来、コンピュータ処理をした、綺麗な画像の版が出ている。

The Tale of Squirrel Nutkin ,1903

The Tale of Benjamin Bunny , 1904

The Tale of Pigling Bland , 1913

The Tale of Jemima Puddle-Duck , 1908

その他。

15) C.S. Lewis, *Surprised by Joy* , *The Shape of My Early Life* (Geoffrey Bles, 1955) 参照

16) たとえば、Richard Adams, *The Watership Down* (Puffin Books)

17) Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (Puffin Classics, 1911年、初版。1951年版使用)

C.S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe* , ch. 6. (Puffin Books, 1959年初版。1975 年版使用)

18) マーヴィン・ピーク (著) 横山 茂雄 (訳)『行方不明のヘンテコなおじさんからボクがもらった手紙』(国書刊行会、2000年)

Mervyn Peake, *Letters from a Lost Uncle* 1948年初版。